

豊かな日本の損得勘定書？

竹内靖雄著『経済倫理学のすすめ』雑感

南 隆昭

(一)

この本の三二ページに、「過去から現在までの善や正義に関する学説を吟味し、解釈し、また学説間の関係や系譜を論じたり」する「倫理学という学問」はこの国にもあるが、それは、世の中の「道徳問題や倫理問題に直接に答えてはくれない」とある。

「直接に答え」ようとしない学問に「倫理学」の名は許さぬぞ、と読める。次に「直接に答え」るにしても、論理を突き詰めるだけで答えを出して行動するのは現実を無視した飛躍だし、神的な理性を想定してそれに従って判断するのは「その立場を受け入れる人にか」(三三ページ)できないことで、「感情」に属する(客観的価値測定基準を欠くの意か)、道徳・倫理は「感情」問題だが、「感情」の暴発は危険だ、結果の損得を冷静に「勘定」して行動せよ、というのが「感情から勘定へ」と副題のある本書『経済倫理学のすすめ』の題意であろう。「勘定」とは、「感情」を一旦停止しつつ、行動によって、現実の新たな面を開発し、自らの価値観を再構築しつつ、積極的に人生を切り拓くことでもあらう。その行動原理を、著者は、利己心を活力とする自由競争と

いうアダム・スミスの立場に学んでいる(四五ページ)。スミスは「見えざる手」による調和を説いたから、本書も、豊かな日本の現状に、楽観的に処することのすすめであろうと予想して読み進めよう。(しかし、「現実の倫理問題の大半は限りなく経済問題に近い(五二ページ)」とあるから、「勘定」できるのは「大半」であって、全部ではないことを、著者も認めている。「感情」的言語が紐帯となる関係(愛、信頼、信念、信仰等、人格的な関係・態度)が、破綻したとき一時的に行う代替的な関係が財貨の授受であり、財貨とは客観的に価値の測定ができる、幸福開発の可能性である。現にある「幸福」が、少々雲行きが怪しくなれば「幸福開発の可能性」という異質のものに交換してもよい場合が「大半」だと論じられるのも、世相なるかな、である。真実の「感情」がないのに「勘定」して、あるフリをしている場合は、終始一貫した「勘定」だから、本書の趣旨の埒外に出る。真実の「感情」があっても、例えば会社員の「愛社精神」などは、多くの場合、自分のために会社を愛するという、「勘定」的「感情」である。これは、著者の言う「大半」の中には入るが、「勘定」に出発した「感情」を、元に戻すことの勧めは、著者の主たる目

的ではない筈である。「大半」の外に出る例も少なくない。信頼し合っていた兄弟が、神の存在をめぐって対立し、とうとう金で話をつけたなどは話にもならないから外に出る。次に、はた目には「大半」の中なのに、当事者が「勘定」を拒否する場合がある。この場合、説得者の用いる公式は、「Aのことは深く忘れてBに心を注ぎなさい。資力を蓄えれば道が開けるのです。」そこでA、Bには、それぞれ、「愛し合っているが貧乏で病気の青年」と「お金のある健康な、他の男性」が入ったり、「国際平和」と「武器輸出」が入ったりする。これらを「勘定」可能だとする。「はた目」が、「公平な観察者」である場合は「大半」の中に入る。しかし、「草枕」の作者も出て来て、「意地を通せば窮屈だ」と「勘定」を勧めてくれても、二つの「かんじょう」を媒介する根拠が、どうしても見つからないとき、当事者たちは、ノーを貰って「感情」の中に留まるだろう。著者の言う「大半」の中身が、どんどん減ってしまわないかと気がかりになる。

(二)

スマスのすすめる「自立・自助」の姿勢をとる場合、「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」に人を助けたいと歌う詩人のような世話好きに干渉されるのは迷惑である。むしろ、全員が自分だけの世話をするのが正常な社会だ(一章)と著者は言う。しかし、「西ニ疲れた母アレバ、行ッテソノ稲ノ束ヲ負」わねばならぬ、まだ「正常」ではない日本に与える、著者の次者への期待をこめて、この文では、あえて悲観主義的な雑感を申し上げることにしたい。例えば、地価問題について著者は言う。東京一極集中の結果だか

ら土地獲得競争の激化はやむを得ない。どんな対策も事態をこじらせる。土地長者への嫉妬を抑え、自由競争の現状を静観しながら一極集中の自然な解消を持つのが得策だ(七章)、と。それから、ジャパン土地マネーが諸外国の不動産を、買い漁っている現状を見て、日本人である私が嫉妬を抑えても、外国人が「静観」してくれない場合の外庄をどう「勘定」するのか。T W K大などへの少数極集中についても著者は言う。甲子園出場が競争なら、T W K大入試もまた競争だ、目標を持って努力するのは明るい人生だ(五章)、と。しかし、甲子園経験者が、学閥ならぬ野球圏を作って、官民の両方にわたる重要な組織の上層部を独占する特権階級となったという話は聞いていないが、T W K大の方はどうだろうか。年々生産され続ける、歴大な落伍者の群れという、競争の波及効果を、どう「勘定」するのだろうか。資産もなく、さしたる学歴もない非特権階級といえども、今では革命への自由を叫ぶことはないだろうから、著者は革命について、それは少数の革命家が、新しい体制を押しつけて人々の自由を奪うだけのことだ。革命の自由はあってはならない(六章)、と言う。勿論、そんな危ないことは、誰もしたくない、「疲れた母」と一緒に、天国でも夢想しながら、エライ方々に好かれるように真面目に働きましよう。そして、その代わりと言うわけでもないが、大資産家には底分を上回る税を納めて福祉国家に協力して頂き、下積みのみ我々はその恩恵に浴して、生活を保証して貰いましょう。みんな平等に……と、新聞にも書いてあるほど穏健な思想にたどりついて、「勘定」が合うかと思つたら、なんと、その考えは全部間違いだ、この本は言う。社会的弱者の自覚は、努力を怠つて国に

頼ろうとする全員乞食化への道で、社会が活力を失うから「勘定」が合わない。だから、被保護者の数は最小限にしよう（8章）。それに、金持ちの税率を高くするのは、大衆の嫉妬を利用して、取りやすいところから税を取ろうとする便宜主義だから、節税のプロに裏をかかれて逆効果だ（4章）と言う。つまりは夜警国家への逆戻りのすすめか。とは思っても、それなら頑張ってひと旗あげようと思うのは一瞬だけで、零細資本では参入障壁が高すぎるし、多数の従業員の雇用の安定のためにこそ、大企業は保護するべきだと、力説なさる政府高官の顔も思い出される。経済マラソンの最後で、足を動かしているだけの劣敗者の生き甲斐をどう「勘定」すべきかを、この本は「直接に答えてはくれない」から、「疲れた母」と「緒にイッソ此の世を……」と思うと著者は察しが良くて、「冷酷な神の目」に、自殺は弱者の社会的淘汰と映るぞ、とたしなめてくれる（10章）。しかし、弱者を抱え込んだ集団が、緊急避難として行う「勘定」を、著者は否定してはいないようだ（1章、6章）。

それなら、というわけで、数人の落伍者が展開している生き残り作戦に対する、評者の寸評を、ここに、ご披露する。登場するのは春秋に富む若者たちである。

まずは、受験に失敗したショックがまだ続いているA君。「オレは暴力に生きる」などと言う。彼の受験の動機には「勘定」が混ざっていたが、既成の秩序に食い込んで「勘定」を実現することが不可能と分かった。そこで自前の秩序を作ってその頂点に坐ってやるという意味であろう。「暴力」を抹殺するためには、全世界が「武力」と化することを、知っているからこそ、自分の

行為に「暴」の字を冠して自分を抑えて、悔しさを堪えている。つまり、ささやかながら必死で、彼は「感情」の「暴発」を抑えるという「勘定」を、実行している。

次はB君。郷里の山に入って、ハイカーの世話をするらしい。そして、死ぬまでには、納得できる一篇の詩を書きたいと言う。自然の中で暮らして生命の美しさが分かったとも言っているから測定不可能な価値の世界に生きるつもりらしい。「感情」化志願者である。そもそも「勘定」とは、挫折の突破口だから、「感情」を、挫折することもなく貫くとすれば、その一生はすなわち幸福の別名である。

最後にC君。浪人経験は数年、今年やっと第十番目の志望校に合格。今の生活の中心は、「障書見専門ボランティア」。将来の見通しは、「新中間層」。理想の人生は、「自分の好みに合った気楽な生活を通して、ひとの役にも立つこと」。権力への志向が消えたせいか、生きのいい自分の言葉で、日常を語ってくれる。狭く小さな行動範囲だが、その日常には独自の秩序がある。時に、一人称複数で自分を語るので、一人でいても「連帯」の雰囲気がある。彼の秩序に他者が組み込まれているからであろうか。生活の「気楽さ」という「感情」を手に入れる手段として、彼は「勘定」をする。数年後の彼も、権力による管理の行き届いた、小さな世界にいらるだろうが、自前の言葉の鮮度は落ちていないだろうと予測できる。権力者との直接の接触が皆無に近いことがその理由である。受験一極に集中していた少、青年期の価値観が、失敗によって解体、拡散した跡へ、多様な価値観が流れ込んだハズミに、普遍的な人間性が発露したのかも知れない。（これが、同年代の

人口の中で多数派となる筈の「C君たち」に寄せる、評者の希望の観測だけでないことを祈る。) 少なくともこの三人、「勘定」一辺倒という、黄金一色の世界へと飛翔せず、多少の差はあるが、「感情」の翳を持って、人間の匂いを漂わせながら、元気に生きている。

(三)

公平に自他を観察し、「適正なルール」を守って競争する「人」は、同時に、哺乳類の「ヒト」でもある。各個体は能力に応じて、人脈という名の群れを形成・維持し、群れを利して獲得した地位の力を利用して合って群れ全体が社会の上層へと移動しつつ利己心を充たす。その過程で「適正なルール」の遵守は、敵対する群れが相互に他を欺くための迷彩となる。この言い方は、スマスを奉ずる著者に対して、必ずしも失礼ではない。何故なら、倫理が経済に還元され尽くすと、社会は、公共を利する優秀な上位の人々と、劣弱な人々とに二分され(終章)、前者には、ルールを飼い馴らして集金能力を高めた政治家も含まれる(9章)からである。そして、強き者、美しくあれ(終章)と結ぶあたりには、古代ギリシャの風が吹いて、キリスト教起源の平等主義を、隠された弱者の怨恨なりと看破したニーチェの洪笑も聞こえるので、弱者に与する評者までが、爽快になる不思議な一書だ。ニーチェと言えば「超人…スーパー・マン」。それを思い出して童心に帰るのか、それとも、「随所に主となり、天地と一体となる」禅の境地を連想するのであろうか。時間という水平に伸びる線上の一点に垂直線を立てて、現実を脱出し生死を越える、すなわち弱者変じて

「強者」となったのかも知れない。……もちろん、にわか強者は、暫時の陶醉の後で、また視線を水平に倒して、もとの弱者に帰る。しかし、「自由、平等」を、もう誰かにねだりはしない。私すなわち自由、どんな状況の下にあっても自己実現を果たすことを責務として自分に課し、その能力を確信している存在。人とは、「強弱・上下」ではなく均等な自由、すなわち平等。自由と平等という両軸の交点を、自分の思惟の原点とする。自分の置かれた状況に、自分で意味を与える、つまり自分の言葉を持つ。その結果、「適正なルール」の、適正さの根源を内面化している「人」となる。……このスケジュールは、単なる自己満足のためのスケジュールではなくて、政治学のプログラムにも、つながるかも知れない。というのは、マス・メディアが日毎に流す「正論」は、大衆の嫉妬や怨嗟と共謀して作られたオハナシを含んでいて、「世論」となつて、政治に反映することがあると、著者も示唆している(4章)からである。「嫉妬や怨嗟」から自由になって、自分の言葉を持った人の数がどんどん増えると……と読むと、「強者の歌」かと思つた本書にも、弱者が逆手に執れる読み方が隠れていることが分かる。

いづれにしても、競争の波及効果である落伍者、弱者の大量「輩出」、いわば「勘定」廃棄物は、その数において強者を圧倒する。そして、常にナンバー・ワンの地位を狙わざるを得ない強者の宿命というものもある。その宿命に操られて苦闘し、心ならずも弱者へと転落する人の数もまた、決して少なくはないであろう。しかし、これらのことは、著者の言う「感情」問題である。そして、「勘定」して得た富の使い方についても、本書は全く沈黙

しているから、これもまた「感情」問題、すなわち、著者が、「直接に答え」る必要ありと指摘する「倫理・道徳問題」である。従って本書は、「倫理学」従事者に課せられた責務の重大さをも、提示している。〔中公新書叢、一九八九年、二四二頁〕

(みなみ たかあき・倫理学)

〈65頁より続く〉

巨額の財を費やし、「三年喪」に服するなどの際立った孝養を世間に示すことは、仕官の道を開いたり、名声を得る(立身揚名)ための重要な手段の一つでもあったのである。いつの時代も、古今東西変わらない世間事情のようである。

(たかはま ゆうこ・考古学)